

葛根湯 (傷寒論)

組成 葛根4.0~8.0、麻黄3.0~4.0、大棗3.0~4.0、桂枝2.0~3.0、芍藥2.0~3.0、甘草2.0、生姜4.0(乾生姜1.0)

主治 風寒表証、項背強急

効能 辛温解表、舒筋

プロフィール

葛根湯は、『傷寒論』太陽病中篇に初出する処方で、江戸時代後期より広く使用されてきた。とくに尾台榕堂が『類聚方広義』に本方の様々な適応を紹介して以来、幅広く臨床応用されるようになった。落語に「葛根湯医者」があるように、広くその名を知られている漢方処方であり、一般用感冒薬としても広範に用いられている。

方解

本方はその名の通り葛根が主薬であるが、処方構成上は桂枝湯に葛根と麻黄を加えた加味方であり、葛根湯証は、桂枝湯証にさらに別の病態が加わったものと考えることができる。

葛根には解表作用があり、陽明の肌肉の邪を除くと共に清陽の気の上行を推進する。さらに、麻黄、桂枝は発汗を促し、共に外邪を解する。芍薬は、発汗し過ぎないように調節し、津液を輸布し肌肉を濡養して拘急を解す。

生姜は辛温で発散の効があり、麻黄・桂枝・葛根の解表作用を助け、大棗は養陰作用によって津液を養う。甘草は、中焦を補い諸薬を調和し、生姜・大棗と合して衛氣の供給を主る。

四診上の特徴

葛根湯は、本来「傷寒」、即ち急性熱性疾患のために作られた処方である。しかし、副鼻腔炎や頭痛等の慢性疾患にも応用されており、その際の証には相違がある。

1) 急性熱性疾患の場合：風寒の邪を受けて発症した感冒の場合には、悪寒發熱があり無汗で項背部のこりがある。脈は浮数でやや緊を帯びることが多い。

2) 慢性疾患の場合：急性疾患のように典型的な形で現れることは少ない。自覚症状では、項背部のこりがよく認められる。

葛根湯の目標は項背部だけでなく、腹部も含め全身的に

筋肉の緊張のよいことで、腹証では「臍痛」(臍輪の直上の圧痛)を認めることがあり、これは、副鼻腔炎や結膜炎などにしばしば出現する。食欲不振、恶心、嘔吐などのある場合は用いない方がよい^{1,2)}。脈力は概して強い³⁾ことが多い。

使用上の注意

麻黄含有製剤のため、胃腸障害、不眠、発汗、排尿障害などの副作用が出現する場合がある。また体内の邪を発散・排出させる作用があるため、皮膚炎などが増悪することがある。花輪は虫垂炎の傷口がなかなか治癒しなかった例を報告している⁴⁾。

臨床応用

葛根湯が使用される疾患はかなりの数にのぼる。目・耳・鼻・咽頭など、顔面の炎症性疾患を治すことはよく知られている。しかし葛根湯が有効なのは、その治療する病機がこれらの疾患の発症メカニズムと一部重複する場合に限ってであり、万能薬ではない。また、病態によっては、それにあった薬物を加味して効力を高める。

■ 感冒

葛根湯は、風寒型の感冒に適応が多い。とくに発症1~2日目頃で、基本的に風寒の邪が太陽の部位を外犯すると同時に陽明の肌肉まで侵入し、ここで邪正相争しているもので、症候としては悪寒、發熱(まだ熱発していないこともある)、項背部のこり、頭痛などがあり、無汗で(まれに有汗のことがある)脈は大抵、浮数緊である。

細野は、葛根湯の感冒に対する効果について、「一般に、カゼ気味で、肩がこり、頭が痛く、寒気がして、汗の出ていないときは、これを一服のむと發熱に至らず、簡単に治るものである。それでも気分のよくならぬときは、1~2時間おいて、さらに一服のむとよく効くものである」と述べている⁵⁾。

発症してから葛根湯服用までの時間は短ければ短いほどよく、遅れると証が変わって時期を失することがある。服用後は、原典では熱いお粥をすすって布団をかけ、ジワジワと

発汗させるよう指示があるが、いずれの手段でも体を温かく保つ必要がある。

また風寒型以外の感冒でも、ごく初期であれば軽快させる効果があると考えられ、感冒の予防薬としても使用される。

■ 鼻炎・副鼻腔炎・アレルギー性鼻炎

急性・慢性鼻炎、アレルギー性鼻炎などにしばしば使用される。『漢方診療医典』は、副鼻腔炎に対する葛根湯の適応について、「急性期の初期に用いるもので、発熱、頭重、鼻閉塞、膿汁流出、肩こりなどあるものに用いるとよく効くものである」と述べている⁶⁾。細野らは「服薬後数日間は却つて鼻汁の分泌が多くなり、却つて一層濃厚で膿状も帶びてくるが、それを経過すると鼻汁の分泌は漸減し、遂には分泌がなくなるのを通例としている」と記載しているが³⁾、排膿作用が強いので、排膿口が閉鎖している場合に服用すると、出口を失つて激しい頭痛があることがある⁴⁾。なお慢性に移行した場合には、川芎と辛夷を加えたり、桔梗・石膏あるいは薏苡仁や蒼朮・附子を加えて使用する場合が多い。

■ 結膜炎など

眼の比較的表層の炎症性疾患にしばしば使用される。江戸時代の眼科書『袖木流眼療秘伝書』や『眼科一家言』にも、葛根湯及び加味方をこれら炎症性疾患に使用した記録がある。『漢方診療医典』では、麦粒腫、眼瞼縁炎、涙嚢炎、結膜炎、トラコーマ、結膜フリクテンなどの初期に葛根湯の適応があることを述べている⁷⁾。

■ 肩こり、頭痛

葛根湯の『傷寒論』の原文に「項背強ばること几々」とあるのを拡大解釈し、外邪の侵入によらない肩こりにも使用する。葛根湯が適す肩こりの場合、数時間から数日で効果がみられるようである。葛根湯の効く頭痛の多くは肩こりの延長線上にあり、緊張性頭痛である。

■ 頸肩腕症候群、肩関節周囲炎

肩関節及び上腕の痛みやしびれに対し、葛根湯を使用する機会がある。仁科は変形性頸椎症、頸肩腕症候群など78名に対し葛根湯を使用し、条件に適合していれば2/3の症例に効果が得られたことを報告している⁸⁾。肩関節周囲炎の報告もあるが、単独ではなく、蒼朮、附子をえたものが多い。

また葛根湯は、頸関節症や関節リウマチ、腰痛など、その他の関節痛や筋肉痛にも、まれに使用されることがある。

■ 莖麻疹、帯状疱疹、湿疹など

皮膚疾患の初期に使用することが多い。表から邪を外散することによって作用を發揮すると考えられている。発表剤のため、服用後一時却つて悪化することもある。

蕷麻疹の場合、『漢方診療医典』は、「初期に一般的に用いられる。さむけや熱があり、赤く硬く広く腫れあがって、痒みの強い場合によい。熱が強い時には石膏5.0gを加え、便秘気味のものには大黄1.0gを加える」と述べている⁹⁾。

帯状疱疹の場合、発症のごく初期で、水泡のある時期に使用する。一般に、初期を過ぎると効果がないことが多い。湿疹や皮膚化膿症の初期にも適応がある。

■ 感染性腸炎

『傷寒論』に、「太陽と陽明の合病は必ず自下痢する。葛根湯之を主る」、「太陽と陽明の合病、下痢せず、但嘔するものは葛根加半夏湯之を主る」とある。細野は赤痢や大腸炎の初期で、裏急後重を伴う粘液や膿血便が頻回に排泄される場合に用いる機会があることを記し、この時、黃連・黃芩を加えると効果が増すようである⁵⁾と述べている。

■ 乳汁分泌不全

経験的に乳汁分泌不全に使用されている。浅桐らは、葛根湯の内服で非投与例に比し乳汁分泌を増加させ、特にうつ乳例に有効であったと報告しているが¹⁰⁾、産後不全にも有効である。外邪が原因である化膿性乳腺炎にも、葛根湯が適するものがある。

■ その他

夜尿症に使うことがある。吉村は、風邪をひくと夜尿症が悪化する子供に葛根湯を与えて、風邪の好転と同時に夜尿症の軽快をみた経験¹¹⁾から、しばしば使用するようになったと述べている。

進らは、閉経後の女性の腹圧性尿失禁に有効であったことを報告している¹²⁾。

元雄らは、肝硬変に伴う女性化乳房痛に使用したところ、痛みが緩和されたと述べている¹³⁾。

精神疾患では、ナルコレプシーやPostpsychotic Depressionに、また神経系疾患では、重症筋無力症に用いて有効であった症例が報告されている。

<引用文献>

- 1) 大塚敬節ほか 葛根湯を語る(座談会)漢方の臨床 11(6): 24-33. 1961.
- 2) 大塚敬節 症候による漢方治療の実際 p 168 南山堂 1963.
- 3) 細野史郎ほか 聖光園臨床レポート6 頭痛の臨床『細野史郎著作・座談集』第3巻 p167 現代出版ブランニング 1995.
- 4) 花輪壽彦 漢方診療のレッスン p 206 金原書店 1995.
- 5) 細野史郎 漢方医学十講 p 82-91 創元社 1982.
- 6) 大塚敬節ほか 漢方診療医典 p 250 南山堂 1963.
- 7) 大塚敬節ほか 漢方診療医典 p 215-223 南山堂 1963.
- 8) 仁科文男 整形外科疾患における葛根湯と脈について 漢方診療 4 (4): 48-50. 1985.

- 9) 大塚敬節ほか 漢方診療医典 p 301 南山堂 1963.
- 10) 浅桐英男 産後の乳汁分泌に対する葛根湯の使用経験 漢方診療 7 (2): 47-49. 1988.
- 11) 吉村得二 婦人科疾患を語る 漢方の臨床 4(4): 26. 1957.
- 12) 進純郎ほか 腹圧性尿失禁に対する葛根湯の有用性 第47回日本東洋医学学会学術総会講演要旨集 p 126 1996.
- 13) 元雄良治ほか 肝硬変に伴う女性化乳房痛に対する葛根湯の有用性 漢方医学 20(12): 15-17. 1996.